

石浜みかる氏の『証言・満州キリスト教開拓村 国策移民迎合の果てに』は、キリスト教開拓村に移民したキリスト者の証言が多く記載されている。証言を集めるのにも、大変な苦労があったと思う。重い言葉の幾つかを抜粋して紹介したい。

藤本宮江さん（取材時 86 歳）「満州の秋は短く九月になると、仮設住宅は住んでいられない寒さになりました。現住民のオンドルのある土煉瓦で作った家を明け渡してもらったのはこの時です。中央部落と西部落です。無理に空けてもらうというか、無理やり追い出したというか。行き先の宛があったのかどうか、彼らは黙って家を出ましたが、心には怒りがあったと思います。肥沃な土地を損な価格で取り上げられ、私たちは白米や灯油の配給があったのに、彼らは闇商品での生活を強いられました。謝り切れない。甘い考えで出掛けて行って申し訳ない。中国での『反日』が今の私にはよくわかります。」

炭本節子さん（取材時 82 歳）「誰も知らないこの話を、死ぬ前に私は誰かに話しておきたかったのです。よくぞお電話くださいました。… 賀川豊彦の本はもちろんよく読んでいました。募集の趣旨は、模範的な村を作って、満州の開拓者にキリスト教を広めたいということのようでしたから、賀川さんなら協力しようということになったのです。… さほど間をおかず治和雄（義兄）から手紙が来ました。開拓団では現地民の土地を取り上げて入植したのだ。土地は未開墾ではなくきれいに耕してある既耕地だった。家も取り上げて、寝起きしている。現地民は開拓団のものになった土地で働いておる。力づくでないにしろ、聞いた話とは違う、とありました。」義兄は驚愕し、義父は良心にとがめて怒り、「賀川さんの話は信用できない。もう本は読まれんと私たちに言いました。」日本の現住民へのあまりに理不尽なやり方を怒り、日本人村から、中国人村に行ってしまった人がいたと読んだことがある。植民地支配のやり方に憤慨した日本人もいたということらしい。

小梨信雄さん（敗戦時 13 歳）「敗戦になったのは、母こせきが亡くなって 100 日後のまだ悲嘆にくれている時だった。村は周辺の農民にすっかり略奪された。喜びを与えてくれた村の全てを残し、後ろを振り向かず、命がけでハルビンに逃げなければならなかった。父智元が 47 歳だったので、開拓民男子の一斉召集（45 歳以下）を免れたのは幸運だった。途中から加わっていた老いた祖母と開拓村で生まれた幼い弟を連れての逃避行だった。祖母と末の弟は厳冬のハルビンで亡くなった。葬儀もできず打ち棄てた。」

榎本和子さん（1943 年 4 月、17 歳で入植）「キリスト教開拓団では軽機関銃や小銃や弾薬を団倉庫や各自の家に所持するということにはなかった。その方針は現地民に伝わっていた。『すべて剣を取る者は剣にて亡ぶるなり』とのイエスの教えに身をゆだねたこの一事によって、もっとも大事な命が助かったのだ。ハルビンへの逃避行ののちは、日本人経営の有賀病院で看護婦見習いとなり、『麻酔薬なし』の想像を絶する修羅場で、あらゆる手当を手伝った。年が変わるとソ連兵や怒りに燃えた中国人の暴徒に性的に暴行された開拓団の女性たちの胎児の人工流産、のちには生まれた赤ん坊の『淘汰』の手伝いもあった。」

忘却させられた記憶が明らかに証言されるまでには、長い年月が必要であった。小川（旧姓土井）信子さんは引き揚げ列車に乗ったのは 5 歳の幼児の時であった。消せない記憶を思い続けていた 1981 年に『福音と世界』に掲載された戒能信生牧師の論文を読み、キリスト者の満州開拓団の事実を知った。戒能牧師に、「私は、ただ親に連れられて行って帰って来た…に過ぎませんが、その背後に、日本基督教団挙げての国に加担する姿勢があったとは…」という手紙を書き送ったという。国家、戦争について考えさせられる本であった。